

ボランティア活動報告2018

「大学間連携合同学習会・関上バスツアー」

今年度も5月12日(土)に関上バスツアーが行われました。関上バスツアーは、毎年尚絅学院大学が年度初めに行っている活動で、東日本大震災で名取市でも特に被害が大きかった関上の地域を訪問し、自分の目で景色を見て現地の語り部さんにお話を伺うことで、被災地を知る学習会です。今回のバスツアーは他大学と合同学習会として行われました。ボランティアチームTASKIのメンバーを中心とした尚絅学院大学の学生のほか、東北大学から24名、東北学院大学から1名が参加し、学生・教職員計78名が参加しました。



参加者全員で日和山に登りました



日和山から見た関上の様子



語り部の長沼俊幸さんにお話を伺う学生

まずバスで向かった場所は、関上のシンボルでもある日和山。ここでは語り部の長沼俊幸さんから震災当時の様子を伺い、実際に日和山に登り、頂上から関上の地域を見学しました。震災から7年経った関上は、あの日から時間が止まったようにどこか地域全体が物寂しい様子でした。

ここ関上地域では、津波到来時に逃げる人は少なかったとされています。「なぜ関上の住民さん達は津波から逃げなかったのか」。長沼さんのお話から、関上の『言い伝え』がカギであることが分かりました。

実は、関上地域は昔から「津波は来ない地域だ」と言われていたそうです。その言い伝えは、東日本大震災以前に発生したチリ地震などでも津波は一度も来たことがなかったことから地域全体に言い伝えが広まった結果、東日本大震災当日も「ここには絶対津波は来ない」「津波は来るはずない」と信じ込んでいた方もおり、中には津波警報が発令されていても逃げなかった方もいたそうです。そのため、多くの方が今回津波によって犠牲となったのではないかと話されていました。



日和山で語り部さんのお話を聞く学生

次に、日和山の隣にある震災の慰霊碑を見学しました。関上では震災後、震災の犠牲者をしのび、復興に向けた決意を表すため、慰霊碑が建てられました。この慰霊碑の高さは実際に関上に来た津波の高さで 8.4mあるそうです。「津波はこんなに高かったのか…」と参加した学生は慰霊碑の先端を見つめ、津波の恐ろしさを痛感していました。そして、参加者全員で慰霊碑に手を合わせました。



参加者で慰霊碑に手を合わせました

午後は尚絅学院大学にて TASKI の学生による活動紹介と語り部さんの講話を聞き、学生同士でグループディスカッションをしました。最後には各グループごとに発表を行い、全員で意見を共有しました。ここで、参加した学生が今回の活動を通して考えたこと、感じたことをいくつかご紹介します。

参加した学生が考えたこと・感じたこと



活動紹介をする TASKI の学生

今まではテレビなどのメディアを通してでしか被災地の状況を見ることがなかったが、**直接自分の目で見ることで、自分なりに東日本大震災のことを考え直すことができた。**これからも他の被災地について調べるなどしていきたい。(表現文化 1 年 K・I)



長沼俊幸さんによる講話の様子

閉上という地域は、一度も訪れたことがなかったため、どのような所か全く分からなかった。しかし、足を踏み入れると静寂な雰囲気が漂っていて、なんとも寂しい気分になった。仙台の街並みに慣れている私は建物がほとんどない閉上の様子を見て言葉に出せなかった。今私たちに出来る事は、震災でおきた事や経験を次世代へと、自分たちの声で伝えていくことだと思う。

(表現文化 1年 R・I)



大学でのグループディスカッションの様子

今回、閉上バスツアーに参加してみて、「震災」という自然現象によっておこるものの恐ろしさを身をもって知った。「復興」という言葉には元通りに戻そうとする意味が隠されておりそうだが、元に戻ることはできないので、「復興は終わることがないことだ」ということをグループワークで学ぶことができた。(環境構想 1年 S・A)



今回学んだ事をグループ内で共有しました

2年目のバスツアーだったが、昨年の秋頃に比べて土地整理が進み綺麗になっていたり、日和山の鳥居がリニューアルしたり、「新たな閉上づくり」が促進されていることを改めて知った。今回を機に新たに考えることがあり、自分にとってこれからやりたい事も見えたような気がする。グループワークでも話し、考えたことを今後実際に行動に移したいと思っている。(健康栄養 2年 S・H)

グループディスカッションにて「私たちが復興の為にどうすべきか、ではなく被災者の方にとって復興はどうあるべきかを考える」という印象的な言葉があった。被災した方にとって最善とは何なのか、これを考えて活動することが課題なのではないかと思った。

(環境構想 3年 N・O)



参加した学生のバスでの様子



最後は各グループの意見を全員で共有しました

今回の学習会で初めて関東に来た学生も多く、東日本大震災に改めて向き合い学び直した1日となりました。メディアではなかなか現在の状況が分からない被災地の様子を見て、「被災地へ今自分に出来る事はなにか」と考える学生の声が多くあがりました。今後も私たちは、被災地に寄り添った支援活動を続けて行きたいです。

文：連携交流課ワークスタディー
人間心理学科4年 伊藤ちひろ